

令和 2 年 6 月 24 日現在

機関番号：34513

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K01899

研究課題名(和文) 今日の親の親性形成と親子関係の質の向上を促す支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of support programs for promoting the improvement of the quality of the relationship between parents and children and building parenting skills in today's parents.

研究代表者

寺見 陽子 (TERAMI, YOKO)

神戸松蔭女子学院大学・教育学部・教授

研究者番号：20163925

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は今日の親の対乳児への関わりの特性を明らかにし、その質的向上を図るプログラムの開発が目的である。視覚的共同注意に着目して、2016-17年と1994-96年に生まれた日本の乳児と母親(2016-17は父親も)、アメリカの乳児とその母親(2016-17は父親も)の行動比較した結果、今日の日本の母親・父親は、言葉かけ、語りかけ、親自身の情動的な表現力を高める必要があると推察された。この結果を踏まえ、今後乳児と親の言語的表出的かかわりの質を高めるプログラムを構成し、実践効果を検証していく予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日、メディアの発達や社会環境の変化等による対人・モノとのかかわりの変化は子どもの発達に影響を与えている。特に言葉の遅れやコミュニケーションに課題がみられる。本研究は、今日の養育者のかかわりの変容と特性を明らかにするために、2017-18年の日本とアメリカの母親と1994-95年母親と9か月児との自由遊びを比較した。その結果、日本の母親の言葉かけは約二分の一、発話数語彙数もかなりの減少が見られた。今後、親子の関わりの質を高めるために、語り掛け、親の自己表現力、親子の相互性を高めるプログラムを開発し、実践していく必要がある。今後その成果を明らかにする予定である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is twofold. One of the purposes is to develop support programs for promoting the improvement of the quality in relationships between parents and infants. The other purpose is to help build parenting skills in today's society.

研究分野：子ども学

キーワード：共同注意 相互性 言葉かけ 情動的かかわり 親 関わりの質 養育性 プログラム開発

1. 研究開始当初の背景

近年、新しいタイプの言葉の遅れが乳幼児にみられるようになったという(片岡、2009)。音、光環境に反応するが、親が呼んでも振り向かない、目を合わさない、母を見ず母の持つ食ベモノに興味を示すなどの共通した特性をもち、病院で自閉症と診断される場合もある。乳幼児の場合、こうした反応が発達の一過的現象として現れることもあり、発達のな問題かどうか見極めが難しいといわれる。日本小児科学会が2003年に17ヵ月から19ヵ月を対象に行った調査では、1日4時間以上の子ども(長時間視聴児)は、4時間未満の子どもに比べ、有意語出現の遅れの率が1.3倍という結果を示しており、子どもの言葉の遅れが危惧される。既に15年以上経過したいま、乳児期の養育者とのコミュニケーションがさらに変容してきているのではないかと推察される。人間性の基盤のできる重要な乳児期の養育者の関わりを見直す必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、そうした観点から、今日の養育者の対乳児との関わりの変容と親性及び親子コミュニケーションスタイルの特性を明らかにし、親性の形成と親子関係の質を高める支援プログラムを開発することを目的とした。本研究の内容は、(1) 母子の **interaction** と **engagement** の変容に関する研究—(-20年前の母子と今日の母子との日米比較検討を通して—、(2) 父子間と母子間のコミュニケーションスタイルの特性に関する研究、(3) 親の親性と養育意識に関する質的検討、(4) 親子のコミュニケーションの質を高めるピアレンティング・プログラムの開発であった。

乳幼児期は、人間性の基盤が形成されるときである(Erickson, 1950/1977)。特に乳児期は養育者の保護と世話を受けながら生理的適応を果たし、その養育者と愛着の絆で結ばれ、人への基本的な信頼感を獲得するという、生物的なヒトから、社会的存在の人となる基盤が形成されるときである。乳児は、特定の人からの世話を受けながら、その人のかかわりを通して、共同注意から並列的な二項関係へ、そしてモノを介在した三項関係へと変化し、回りのモノや場(外界)、意味や感情を人と共有し、人と自分の間に間主観的空間を感受するようになる(Trevarthen & Hubley, 1978)。このような、自分一人(二項関係)や自分一人(三項関係)の関係の生成は、その後の言語の発達の基盤(Scaife & Bruner, 1975)や社会的コミュニケーションの先駆体が形成される。そうした発達の変化は6ヵ月頃から現出し、9ヵ月頃に養育者と自発的に共同するようになる(Tomasello, 1993)。そして、13ヵ月頃に言語コードが入り込んで養育者とコミットメントできるようになり、18ヵ月頃から空間表象的になるとされる(Adamson & MacArthur, 1995; Bakeman & Adamson, 1984)。二項関係から三項関係への変化は、乳児の認知的な発達に負うところが大きい、はじめは親からの刺激によって引き起こされ、やがて乳児は目を引く環境(例えば、モノの図柄やおもちゃ等)や相手の意図性に誘引されるようになる。つまり、養育者の果たす役割が重要であることが指摘されている。

この過程で成立する、同一の対象に対して注意を共有している状態は、共同注意(joint attention)と呼ばれる。この共同注意の概念は、乳幼児期においてコミュニケーションの構造が自己一人という二項関係から三項関係へと移行する際に重要であり、その後のコミュニケーション発達の礎ともなる(Dunham, P. J., & Moore, 1995)。乳児の共同注意の研究に最初に取り組んだのは、Scaife and Bruner (1975)である。彼らは、「同じところをみる」という視覚的共同注意は生得的なものであるとした(Bruner, 1983/1988)。その後、この視覚的な共同注意の共有に関する数多くの実験的な研究がなされ、乳児は生後9ヵ月齢から12ヵ月齢ごろに他者の見ているモノに注目するなど他者と視線を共有することが明らかにされた(Butterworth, 1995, Tomasello, 1995, 矢藤, 2007)。Butterworth (1995)は、子どもが養育者の視線を後追いつける視覚的共同注意に注目し、「誰かが見ているところを見る」とことと定義し、これは生態学的メカニズムによるものであるとした。それに対して、Baron-Cohen (1995)は、他者の視線方向を読み取る「視線検出器」と自分と他者が同一対象に注意を向けているかという「注意共有メカニズム」という2つの神経学的メカニズムを想定し、共同注意に自分と他者の注意が共有されていることの「理解」を定義に含めた。さらにTomasello (1995)は、ただ単に養育者と子どもの視線が同じ対象に向いているというだけでなく、お互いに相手の対象への注意をモニタリングして二者の注意の焦点が共有されている状態であり、共同注意成立は他者を意図的行為主体として理解することが必要だとして他者の意図理解や表象などの概念も共同注意の定義の指標に含めている。

この共同注意の定義については、研究者によって様々な見解があり、未だ定義や内容の一致を見ていない。大藪(2003/2014)は、共同注意について対面的共同注意、支持的共同注意、意図共有的共同注意、象徴共有的共同注意の4種類を想定している。その共同注意の研究パラダイムには2つの基本タイプがあり、一つは乳児と他者とが同一対象に注意(一般には視線)を向けたかどうか、その有無を問題にする「事象(event)型」、もう一つは相手と同じ対象物に注意を向け合った場面で生じる現象、共同注意の持続的場面で生じる行動を問題にする「状態(state)型」である。いずれも、そこで観察される現象から乳児の精神世界の働きを検討し、共同注意が精神発達に果たす意義を明らかにするためのパラダイムである。

本研究では、母親と乳児の視覚的共同注意に注目し、今日の母親の対乳児への関わり的事象と状態の変化とその特性との関連を検討することによって、かかわりの質的向上を図る観点を導出し、親のかかわりの質を高めるプログラムの開発をすることを目的とした。

3. 研究の方法

◆対象：

1994-1996年に生まれた日本の乳児とその母親6組（男児3名、女児3名）、1994年に生まれたアメリカの乳児とその母親6組（男児3名、女児3名）。アメリカの被験者は、筆者がアメリカで1年間在外研究した時の被験者である。3か月から1歳になるまで月二回家庭訪問し、30分間の自由遊び場面と30分のインタビューを行った乳児とその母親である。また、日本における母親も、アメリカの母親との比較研究のために、同じ条件で3か月から1歳になるまで月二回家庭訪問し、30分間の自由遊び場面と30分のインタビューを行った乳児とその母親である。また、今日の被験者は、2016-2017年に生まれた日本の乳児とその母親・父親7組（男児4名、女児3名）とアメリカの乳児とその母親・父親10組（男児6名、女児4名）は、本研究のために研究協力を依頼した被験者である。

◆手続き：

家庭訪問をおこない、自由遊び場면을30分VTRに収録した。1994-1995年の母子データは収集したものがあるので、そのデータとの比較が可能ないように、今回の研究におけるデータ収集の仕方は統一した。

◆分析方法：

黒木・大神（2003）は、日常生活場面における共同注意の標準的な発達順序の確認、共同注意発達と他の発達指標との比較を可能にする、共同注意に遅れを持つ子どもの検出のために、共同注意行動を幅広く包括的にデータ収集し、共同注意発達評価法を開発している。本研究では、黒木・大神による尺度を参考にチェックリストを作成した。チェック項目は、①発声、②子どもの情動表出、③大人の情動表出、④叙述的身振り、⑤共同注意、⑥大人の視線、⑦子ども視線、⑧接触、8項目に、下位項目として、行為の発動を示す（子どもからか、大人からか）項目を設定した。分析に際しては、家庭における自由遊び30分間のうち後半10分を分析対象に、10秒ごとに区切り、生起頻度を記録した。コーディングは心理学を専攻する2人の観察者によって行われ、一致率は $\kappa=.086$ であった。また、VTRの逐次記録を作成し、発話数（統語的切れ目）、発話のユニットを算出した。

◆倫理審査：

神戸松蔭女子学院大学の倫理審査委員会より受諾を得た上で、各被験者に研究内容を説明し、了解を得たうえでお互いにサインをした文書を交換した。1994-1995年のアメリカにおけるデータは、ウィスコンシン大学の倫理審査委員会の承諾を得た。日本では、当時まだ倫理審査が行われていなかったため、被験者である保護者に研究の概要を説明し、承諾を得た。

4. 研究成果

母親と9か月児の視覚的共同注意に着目して、2016-2017年と1994-1996年に生まれた乳児とその母親の行動比較し、今日の母親の対乳児への関わりの変化とその特性について検討した。

その結果、母から子への発声、子の快表現、母の快表現、母からの子へのモノの提示、それに対する子の反応は、いずれも1994-1996年の母親の方が圧倒的に多かった。また、母親から子どもへのモノの提示・手渡し、子どもから母親へのものの提示・手渡し、モノの同時注視、母親から子どもの顔や体に向ける視線、子どもから母親の顔や体に向ける視線、同時注視の前後に起こる母⇒モノ⇒子⇒母という相互性は、1994-96年の母親の方が多かった。一方、2016-2017年の母親は、子どもの持っているおもちゃを見る、子どもも自分の持っているおもちゃをみることが多かった。反対に、1994-1995年の母親は自分の持っているおもちゃを見る、子どもも母親の持つおもちゃを見る事が多かった。また、2016-2017年の方は、母親からの子どもへの接触行動、子どもから母親への接触行動が多かった。発話に関しても1994-1996年の母親の方が多く、約2倍であった。発話のユニットも1994-1996年の母親の方が多かった。

同様の手法で父親の分析も行い、母親との比較を行った。父親はいずれの項目においても母親より少なかったが、情動表出と子どもの顔や体を見る視線は母と差がなく、また他のいずれの項目よりも多かった。

また、アメリカの母子との比較を行った。アメリカの場合、1994-1996年の母親は、母親からの発声や子どもからの発声、情動表出、叙述的身振りは多かったが、同時注視や子どもを見る視線、子どもが母親を見る視線は2016-2017年の母親の方が多かった。日本の母親と比較したところ、2016-2017年の日本の母親と同年代のアメリカの母親では、母親からの発声、子どもの不快情動表現、子どもの顔を見る、において日本の母親の方が多く、子どもからの発声、子どもの快情動表現、母親の快情動表現、母親の働きかけに応じた子どもの反応、子どもの持

つおもちゃ・子どもの体を見る母親の視線、母親の持っているおもちゃ・母の顔・母の体を見る子どもの視線、母親からの接触行動、子どもからの接触行動は、アメリカの母親の方が多かった。

こうした結果から見て、親子の関わりの質を高めるためには、養育者の言葉かけ、語りかけ、親自身の情動的な表現力を高める必要があると推察された。乳児期は、対人行動や関係形成の基盤となる愛着形成が重要な時期である。乳児期は子育てへの不安やストレスが最も大きく、支援の課題としては、不安やストレスの軽減、子育ての知識や愛着形成に援助の軸がおかれる。今日、赤ちゃんプログラムとしては、例えば、PB プログラム「赤ちゃんが来た」(原田、2018)、アタッチメント理論に基づくビデオを用いた COS プログラム (Cooper, G., Hoffman, T., & Powell, B. & Mavin, R., 2005) 等の、有資格者による要請的開発的なプログラムや、治療的なプログラムがある。しかし、語りかけの質を高めるための、日常生活の中で関わりを学ぶことができる支援の在り方を示したものは見当たらない。あったとしても、その多くは幼児期以降になって言葉の気かりさを感じた子どもへの治療的アプローチである。これら先駆的に行われている乳児プログラムと本研究の結果を踏まえて、乳児と親のためのプログラムを構成し、実践する予定であったが、新型コロナウイルスのため実践がかなわず、ここに結果報告できなかった。今後、プログラムの開発とその成果の検証し、その成果を踏まえ、乳児保育と連携させたプログラム開発をしていく予定である。(令和2年度科学研究費基盤研究C「家庭養育と乳児保育の質の向上を促す家庭と乳児保育の連携プログラムの開発」：課題番号20K026434)

<文献>

- 片岡直樹 2009 テレビを消したら子どもがしゃべった、笑ったメタモル出版
日本小児科学会 2004 乳幼児のテレビ・ビデオ長時間視聴は危険です日本小児科学会誌 108:709-712,
Erickson, E.H. 1950/1977 仁科弥生訳幼児期と社会みすず書房
Trevarthen, C. & Hubley, P. (1978) Secondary intersubjectivity : Confidence, confinding and acts of meaning in the first year. In A. Lock (ed.) , Action, gesture and symbol.London:Academic Press.
Scaife & Bruner, (1975) Joint visual attention. The capacity for joint visual attention in the infant. Nature, 253, 265-266.
Tomasello, M. (1993) On the interpersonal origins of self-concept. In U. Neisser (Ed.) , The perceived self: Ecological and interpersonal sources of self-knowledge, 174-184. Cambridge: Cambridge University press.
Adamson, L., & McArthur, D. (1995) Joint attention, affect and culture. In Moore, C. Dunham J. P. (Eds) Joint attention It's origin and role in development Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Association. pp.189-204
Bakeman, R. & Adamson, L.B., (1984) Coordinated attention to people and objects in mother-infant interaction. Child Development, 55, 1278-1289, 1984
Dunham, P. J, & Moore, C., (1995) Current themes in research on joint attention. In Moore. C. & Dunham, P.J. (Eds.) , Joint attention; its origins and roles in development. pp15-28
Bruner, J.S., 1983/1988 Child's Talk.: Learning to use language. Oxford University Press. (寺田晃他訳乳児の話しことば—コミュニケーションの学習—新曜社)
Butterworth, G. E. (1995) Origin of mind in perception and action. C. Moore & P. J. Dunham (Eds.) Joint Attention: Its Origin and role in development (pp. 29-40) New Jersey; LEA.
Tomasello, M. (1995) Joint attention as social cognition. In Moore, C., & Dunham, P. (Eds.) Joint attention : Its origins and role in development. Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum Associates, pp103-130.
矢藤優子 2007 乳児と母親のおもちゃ遊び場面における注意の共有と母親の発話発達心理学研究, 18,1,pp. 55-66
Baron-Cohen, S. 1989 Joint-attention deficits in autism: Towards a cognitive analysis. Development and Psychopathology, 1, 185-189.
大藪泰 (2004) 共同注意の種類と発達大藪泰ほか(編) 共同注意の発達と臨床第1章川島書店 pp. 1-31
大藪泰(2014) 乳児の共同注意の研究パラダイム—人間の心の基本形を探る—早稲田大学大学院文学研究科紀要.59, pp5-20,
黒木美沙・大神英裕(2003) 共同注意行動尺度の標準化 Kyushu University Psychological Research , Vol4, pp203-213
原田正文編著 2018 親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんが来た”日本PBプログラムセンター Cooper,G., Hoffman, T., & Powell, B. & Mavin, R., 2005 The circle of security intervention Differential diagnosis and differential treatment In L.J.Berlin, Y.Ziv, L. Amaya Jackson & M. T. Greenberg (Eds), Enhancing early attachments: Theory, research, intervention & policy. Guilford Press, pp127-151

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 寺見陽子・南憲治	4. 巻 6
2. 論文標題 父親の家事・育児意識と行動の変容とその要因に関する研究ー2000年と2011年のデータ比較を通してー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 神戸松蔭女子学院大学研究紀要 人間科学部編	6. 最初と最後の頁 119 135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺見陽子・伊藤篤はか	4. 巻 10 - 2
2. 論文標題 被養育体験・養育体験と育児に向かう態度形成との関連	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要	6. 最初と最後の頁 231 - 238
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺見陽子	4. 巻 1
2. 論文標題 日本の母親の乳児に対するかわりの変化とその特	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神戸松蔭女子学院大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 123-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 寺見陽子
2. 発表標題 日本の母親の対乳児への関わりの変化とその特性
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 寺見陽子編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 263
3. 書名 現代の父親の親意識と子育て実践	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	久津木 文 (Kutauki Aya) (90581231)	神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・准教授 (34513)	
研究分担者	伊藤 篤 (Ito Astushi) (20223133)	甲南女子大学・人間科学部・教授 (34507)	
研究分担者	南 憲治 (Minami Kenji) (00122284)	京都橘大学・発達教育学部・教授 (34309)	